九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

M・コロー『マチエール＝エモーシオン』

飯田，伸二

https://doi.org/10.15017/9998

出版情報：Stella. 17, pp.237-240, 1998-06-25. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン：
権利関係：

M・コロー『マチエール＝エモーシオン』

飯　田　伸　二

ルネッサンス以降の科学的思考にとって，対象からの「距離」こそは主体が視点を獲得し，主観に歪められることのないありのままの現実を観察・描写するための出発点とされてきた。伝統的な二項対立の図式からすれば客観的・物質的なるものの代名詞ともいえる「マチエール」は，最も主観的で表象さえ困難な「エモーシオン」の対極に位置する。ジャン＝ピエール・リシャールの後継者と目され，近現代文学，ことに詩の分野で数多くの研究成果を発表してきたミシェル・コローは，これら2つの対立概念をただ連結符だけで並べたものを新著のタイトルとした[1)]。副題もない，この憧着語法的なタイトルをまえに読者はある種のとまどいを覚えざるをえまい。

本書『マチエール＝エモーシオン』の命名の起源となったのはじつはルネ・シャールのつぎのようなアフォリスム（『最初の風車小屋』収載）なのだ――

> 自ら詩の完成した形相であることの果敢さ。突然女王となったマチエール＝エモーシオンがきらめくのをかいま見たことの幸福感。

相反すると見なされてきた2要素の意外にして輝かしき融合。コローがこのアフォリスムに強く刺激されたのは，それが現代詩のひとつの問題系を見事に象徴しているばかりか，1960年代以降，文学研究（ことに詩研究）のフィールドを席巻した構造主義・フォルマリスム的アプローチへの鋭い問いかけとなっているからにほかならない。

シャールをふくめ20世紀の詩人たちは「我々の想像力，感情が戯れる空間」と「循環的空間，具体的世界の空間」を包含し結びつけることで叙情詩の分野に新境地を開拓したが，コローの企てとは，彼らの詩論や作品の検討・分析をつうじ「現代の叙情性の再定義」をおこなうことで研究上の新たな視点を導入

することにある。周知のように，構造主義・フォルマリスムが提出し実践した文学研究の独創は，テクスト外の要素を研究の視野から排除し，ひたすらテクストのみを分析するというラディカルな方法論的還元にあった。それによってもたらされた成果はたしかに小さくない。だが，こと詩の分野ではあくまで作品分析のための手続きである方法的還元が一人歩きをはじめ，テクスト外の要素を否定した「テクストの閉鎖性」「メッセージの自己言及性」が「詩的言語」の定義そのものとなってしまった感が否めない。分析の手続きであったものが詩とはなにかという本質論にすり替えられてしまったわけだ。

文学理論が等閑視していた「叙情性」の問題系を正面からあつかい，詩研究に新境地を拓くことを目指すという企図を映して，本書のコーパスは広汎である。独自な章立てのもとに論じられている詩人だけでも，近代的叙情詩の先駆者ランボーにはじまり，ポンジュやロラン・ガスパール，シュペルヴィエル，ミショー，ルヴェルディ，サンゴール，ジャック・デュパン，ベルナール・ノエル，そして詩人で歌手のブラッサンスと，あわせて10人にのぼる。また特別な章立てはおこなわれていないものの，韻律を扱った「リズムと韻律」ではクローデルが，また現代的叙情とその文体的特徴の関連に光をあてた「名詞構文」ではサン＝ジョン・ペルスが，いずれも叙情性を前面に押し出した代表的詩人として，かなりのページを割いて論じられている。また，現代詩と「エモーシオン」との関連をあつかった冒頭の章「感動的経験から詩的感動へ」は本書の方法論的マニフェストとも呼べるもので，マラルメやヴァレリーなど，通常「感動」とは対極に位置すると見られる詩人たちをもとりあげて，主体と世界との関係，そしてそこから生まれる「感動」が彼らの詩法や作品の成立にいかに大きな役割を果たしたかを論証しつつ，「エモーシオン」の復権を唱っている。

論じられる詩人の数が多いにもかかわらず本書が単なるパノラマで終わっていないのは，近現代的叙情性の再定義という基本構想のためばかりでなく，個々の詩人を論ずるさいに現象学・精神分析・言語学など隣接関連分野での成果にも注意を払いつつ，先行研究を踏まえた周到な議論が展開されているからである。これは博士論文『詩的想像力の地平』以来，著者の変わらぬ研究姿勢であり，とりわけ『現代詩と地平の構造』(1989年）はこうした研究姿勢の必要性・有効性の検証をその主要テーマとしていた[2)]。

さらに本書の方法論上の特色として強調されるべきは生成研究の導入である。周知のようにコローは，ここ10年ほどのあいだアンドレ・デュ・ビューシェやシュペルヴィエル，ポンジュの校訂版作成に積極的にとりくんでいる[3)]。彼によれば，生成研究こそは文体研究と人文諸科学のつながりを一層活性化させ，ことばと主体と世界とが融解する「ことばの錬金術」が繰り広げるドラマの様相を最も豊かにとらえることができるのだ。その成果が最も顕著に表われているのがシュペルヴィエルの草稿をとりあげた「生成の錬金術」であろう。同章でコローは，空間の宇宙的な拡がりを前に主体が感じるめまい・錯乱と，その空間が生みだす秩序・調和という相反する感覚をともに主題とする2つの作品――韻文の「弓引く星」と散文の「天空のリズム」――を対象に，ジャンルという形態上の制約が作品の生成や意味作用にいかに大きく影響するかを論証する。そしてページの余白が作者＝読者の想像力を絶えず刺激する韻文では文と文，段落と段落のあいだの論理的・時間的つながりの制約が散文よりも小さく，それに反比例してシニフィアンのイニシアティヴ，主体の衝動が介入する余地がより大きいと指摘する。この結論は，韻文詩を日常言語の対極に位置する言語，完成度の高い閉じられた言語，あるいは書くことそれ自体を主題とする自己参照的言語などとする趨勢への問題提起でもある。

60年代以降飛躍的な発展・深化をとげた理論研究があえて避けてきた「エモーシオン」という，ある意味で危険な問題をあつかいながらも，各章はいずれもが明晰な文体で書かれており，議論の展開にも無理がない。ただし読み手によっては，その明晰さからこぼれ落ちてしまうものこそが「詩」ではないのかと問う向きもあろう。しかしながらほんらい人文・社会科学が，言語化されていない事象を言語化し，それによって新たな問題系を提出することを使命とするかぎり，フランス近現代詩における「エモーシオン」の位置づけを果敢にも試み，それなりの成果をおさめえた本書の存在意義はきわめて大きい。ひとり専門研究者にとどまらず，広く現代詩のありかたに関心をもつ人々にとって必読の一書であるといえよう。

註

1) Michel COLLOT, *La Matière-émotion*, Paris : P.U.F., coll. «Écritures», 1997, 335 pp.

2) *L'Horizon fabuleux*, Paris : José Corti, 1988, 2 vol., 244 et 224 pp. ; *La Poésie moderne et la structure d'horizon*, Paris : P.U.F., coll. «Écritures», 1989, 264 pp.

3) André DU BOUCHET, *Carnets*, Paris : Plon, 1990, 121 pp. ; Jules SUPERVIELLE, *Œuvres poétiques complètes*, Paris : Gallimard, coll. «Biliothèque de la Pléiade», 1996, LXVIII-1112 pp. ポンジュのプレイアッド版は目下ベルナール・ブーニョを責任者として準備がすすめられており，コローは『12の小品』の校訂を担当している.